シマゴマの分布と渡りについて On the migration of *Erithacus sibilans* 石 沢 慈 鳥 Jicho Ishizawa

1. シマゴマの分布 Distribution

シマゴマの分布は大陸では西はアルタイ北はヤクーツク地方の北緯 63° 附近、南はウスリー地方の南部の針葉樹林に広く繁殖し、樺太には多数繁殖する。日本に於ける分布は、日本鳥類目録第 4 版(昭和 33 年 3 月刊行)によれば、北海道(焼尻島)・本州(鳥取・石川)・四国(?)となっており、なお朝鮮・齋州島にも分布し、冬は東支那の雲南省・広東省・海南島で越冬するとなっている。

2. 日本に於けるシマゴマの渡り Migration in Japan

宇田川氏は「日本鳥類目録第 4 版」の刊行に先んじて「鳥」63 号(昭和 28 年 12 月刊行) 82 頁に本種の日本に於ける分布を述べているが、それにははじめて北海道西海岸の焼尻島で春の渡りに ♂ 1 羽が採集されたことを報じ、なお近年山田信夫氏が宇田川氏に「秋季鳥取県を通過するもの珍しくない」と話されたと報じている。それから宇田川氏はシマゴマは春の渡りにシベリアを北上して樺太に渡り繁殖を営み、秋は少数のものが日本を通過して越冬地に渡るが、春の渡りには日本を通過しないであろうと結論を出された。しかし私はこの結論に疑問をいだいたので山田信夫氏に書面を以てお伺いしたところ、次の如く詳しいお回答を頂いたが(昭和 34 年 10 月受領)、実際は鳥取県で見られるのは秋でなく春 5 月であった。それでお伺いしてよかったと思った。

山田信夫氏からのお回答 「実は小生昭和 14 年に鳥取農専に赴任し、同年 25 年まで在職した間に於て、昭和 15 年 5 月末ごろ 自宅の杉垣 及びツツジの植込みにシマゴマの囀りを聞き、始めは耳を疑いましたが、樺太での調査中によく聞き覚えのある囀りにて、全く疑う余地なき同鳥のものでしたが、姿は確認できず、その後いろいろと調査の結果、鳥取の海岸に「賀露」と称する町がありますが、その町の人にて小鳥好きの人が数年間同鳥を生捕りにして飼育しましたとの事を知り、同人に乞いいろいろ調べましたところ毎年 5 月 20 日前後にて 暖かい南風の吹く日に、どこからともなく十数羽で渡り、1 週間前後より 10 日前後附近に留って囀るとのことにて、この日に網の「おとし」を用いて虫の餌にて捕え餌付するとの話にて図鑑も見せ、本人もシマゴマと申す名称も存じているものにて、同鳥に間違いなきことを確認し、当時農林省に捕獲許可を受けて 2 年程渡来を待ちましたが、遂にその後は姿を見せず、戦時中ともなりて続けて調査する機会もなきままに鳥取を去ることになりました次第です、

当時の状況により、恐らく朝鮮半島より渡来したものにて、季節的に少しおそい事より樺太方面へ向うよりもむしろ伯耆大山あたり的高山に入って繁殖するものではなからうかとも考え伯耆大山方面の同好家にも依頼して調査をすすめていましたが、遂に結果

を得られず終りました次第でした。右のようなことにてまことに要を得ていませんが当時は小生も大いに興味をもって調査したものであります。」

山形県における記録 私は大正 9 年 5 月山形県酒田市附近で捕獲された本種 ♀ 1 羽の標本を所有している。この鳥は私の郷里からほど近い山形市の広瀬飼鳥店で飼養していたものを大正 10 年 12 月 24 日に買取り仮剥製につくって保存しておいたものである。当時私は 22 才の鳥キチであったが、標本の蒐集に熱心で飼鳥店で飼養しているものまで買取り仮剥製につくったものである。当時飼鳥店主の話によればシマゴマは毎年の如く酒田附近で 5 月頃捕獲され入荷するという話であった。私の買い取ったものは♀であったがよく鳴かないので売れ残っていたものであろう。

新潟県に於ける記録 これも古い記録であるが、大正 14 年発行の中村正雄編「新潟天産誌」にはシマゴマについて「柏崎比角大正 11 年 5 月中旬群をなして飛来す。蓋し珍らしき現象なるべし」とある。これまた春 5 月新潟県を通過することを証明するものである。

石川県に於ける記録 黒田長久氏から、同氏は 1956 年石川県を訪れた際河北郡高松町の長柄他喜男氏から「大正 12 年 4 月シマゴマの大群来り、至るところで囀って、近くではコマドリの声に似ている」ときかれた由を伺ったので、同氏に書面を以てお伺いしたところ、次のようなお回答を頂いた（昭和 34 年 11 月受領）。

長柄他喜男氏からのお回答 「シマゴマについては黒田長久博士が先年当地にお出になって能登の鳥をお訪ねになりました際同道してお話したものでした。古い記録なので詳細と言うことにはまいりませんが、寒国の 4 月というものはいつの年でも、その陽春の喜びが多いものですが、大正 12 年の 4 月はわけても暖日が多かったように思います。シマゴマの渡ったのは多分 4 月中頃だったと思いますが、私の村落は勿論附近至る所に渡ってきていて、私の家の背戸の植込みのうす暗い下辺、垣根のあたり、砂丘の叢林の下などでは活潑に尾を上げ、胸をはって、さかんに鳴き跳び歩いていましたので、その鳥の姿も動作も十分見ることができました。自動車の通るような道端にもいたように思います。その鳴きはコマドリに非常によく似ていて多少よわく細く ヒヒン キヨロロ……ヒンル……ヒール…… 等というように近くではきかれましたが、特にそのルル……キヨロロ……ルル…… のふい声の所に特徴があつて長かったと思います。そしてあっちにも、こっちにも鳴くものですから、その ルル……ロロ…… が重なって、そこらあたりが リュウ……リュウ…… とうなっているようでした。平生鳥に無関心の人達でも「あの リュウ—— とうなっている鳥は、ありゃ何の鳥やろ」と注意を引かれていた位でした。中には捕獲して飼っていた人もありましたが、これらも旬日ならずして鳴いていましたが、夏は越さないようでした。それからあと 1—2 年は少々渡ったのを見聞しましたが、その後は絶えてその事を認めません。私たちのところは海岸線にそった砂丘裏の林ですけれども、春になれば、ノゴマ・エゾムシクイも囀って通過しま

す。ヤブサメも姿を見せます。お期待にそのようなお返事にならなかったようですが、当時のシマゴマの印象は右のようなものでした。」

以上のようなお回答を頂いたが、なお渡来の年度と月について疑問の点があったので念には念を入れて再びお伺いしたところ、次のようなお回答を頂いた(昭和 34 年 12 月受領)。その結果新潟県と石川県に群来した年月はともに大正 11 年 5 月となり一致したのである。

長柄氏からの第二回目お回答 「シマゴマの渡来の年が先便では大正 12 年になって御知らせしました由。只今先便の控を見ますと確かに大正 11 年になっております。この年は私が師範学校を卒業して新任の教師として本郡の金津谷小学校に着任した年ですから間違いありません。なお 4 月か 5 月かと言うことになりますと、次のように古い記憶の検討をしなければなりません。

新任教師の私が第 1 回目の遠足の際児童を引率して本郡の宇気村——河北潟周辺——を通過しました時、根刈した桑畑の中で盛んにさえずるシマゴマを観察し、児童にもその珍しい事の話をしたことを覚えていますから、桑畑の芽が出茂って来ていたことは 4 月ではない筈になりますし、新学期早々の 4 月中旬では遠距離の遠足は当時の学校行事の習慣としていない筈ですので、(4 月は遠足をしていても近距離の花見遠足、半日行程のもの) この遠足は 5 月だったと考えなければなりません。5 月中旬の方がシマゴマ観察の正しい時季だったと今考え直しています。お多用の所へそっかしい通信を差し上げました事ども何卒お宥恕お願いいたします。シマゴマ滞在の期間につきましては確かな記憶はありませんが 2-3 日位では決してなく、地方人さへ注意を向けたのでしたから少なくとも 1 週間-10 日間はいたものと思います。来る日も来る日も学校へ通勤するのにその囀りの中を通ったのでしたから。シマゴマ先便の訂正右のように申上げました。」

3. シマゴマの渡りに関する私の考察 Discussion

以上鳥取・石川・新潟・山形の諸県と宇田川氏の報告された北海道西海岸の焼尻島で春の 1 羽捕獲された例を合せて考察する時は、後記するように本種は春の渡りに南朝鮮から北九州又は鳥取県に渡り、本州の日本海岸地方を北進して、さらに北海道の西海岸地方を通り、蕃殖地の樺太に渡るものであると思う。もっとも日本を通るものは少数で、樺太には多数蕃殖する由であるから、多くは沿海州を北上して樺太に渡るものと考えられる。

さらに鳥取・石川・新潟の三つの記録によれば、本種はまれに 5 月中旬群をなして日本海岸地方に渡来し、ある地方に 7 日-10 日間位滞在すること、毎年同地方に規則的に渡来することなく、渡来する年と渡来しない年とがあり、たとえ渡来してもその数に著しい変化のあることを知ることができる。しかし、これについてはさらに次のような疑問が残る。

- (i) 果して年によって日本を通過する年と通過しない年とがあるか、どうか。
- (ii) 毎年通過するとせば、果して年によってその数に著しい変化があるものか、どうか。

の二つであるが、今のところ何とも言えない。何分毎年日本を通過するとしても、数日間滞在する地方に変動があれば、鳥類観察家のいない地方に滞在した場合は知られないし、その数の多い少ないことも判らないからである。今後日本海岸地方在住の鳥類研究家のお注意をかんきしたい。いずれにしても本例のようなケースの解明は困難であろう。私の考えによればシマゴマは毎年あるいは毎年の如く日本を通過するが、その数に著しい変化があるのではあるまいか。

しからば、どういう年に多く渡来し、どういう年に少ないかという、その理由は不明という外はない。しかし強いて一つの説明を求めるならば、春の渡りに中国東部から黄海を一飛びして南朝鮮に渡った時、朝鮮や沿海州地方が悪天候の場合には多くは待期して天候の回復を待っているが本州の日本海岸地方が好天にめぐまれているような場合には、若干の個体は朝鮮海峡を一飛びして、山口・島根あたりに渡り、さらに北上するものではあるまいか。これを証明するためには当時(昭和 11 年 5 月)の気象状況も調べる必要があり、この説明は空想に近いものである。それから鳥取・石川の例によれば群来した後は数年間少数のものが渡来し、その後は渡来しない由であるが、これについては次のようにも考えることができる。それはある理由で春の渡りに沿海州を北進しないで、日本を通過して北進した個体は、それが一時習慣となって 1 部少数のものが数年間引きつづいて日本を通過して北進するものではあるまいかと。

以上五つの記録によれば、日本には秋出現する記録は皆無ということになり、宇田川氏説の逆になってしまった。しからば春北上する時は日本を通過し、秋南下する時は沿海州を通過かという、私は必ずしもそうとは考えない。あるいは秋も日本を通過が、数が少ないこと、鳥体が小さいこと、秋は囀鳴しないことなどにより、人に気づかれないものかもしれない。自然は広大であるが人間の観察力は微々たるものである。相当の鳥類観察家で、年中野外観察のできる人は日本に何人いるだろうか。その数は知れたものであろう。仮りに鳥類観察家を各県に 5 人—10 人位ずつ配置して観察してもらったとしたら、鳥類の新しい分布や渡りの新知識がぞくぞくと発見されるであろう。それほど知られざる世界が多いのである。故に少しばかりの観察や資料を以て大自然を測ることは極めて危険である。

4. シマゴマの渡りのコースについて The route of migration

本種の大陸の渡りでは中国東部の外に朝鮮をも通過し、朝鮮では北から南まで見られる由である。また私のノートには昭和 6 年 5 月 10 日夜南朝鮮の西南海岸沖の七発島燈台で 3 羽衝死し(衝死島は元七発島燈台長橋本秀雄氏より小生あて送付された)、また同地沖の竹島(チクトウと読む)燈台で大正 15 年 5 月 13 日夜 1 羽衝死した記録があ

るところより考察すれば、春の渡りには中国東部の海岸地方から黄海を一飛びして朝鮮の中・南部に渡り、多くはさらに朝鮮を北上し、1部は日本に渡り前記の如く日本海岸地方を北上するものとする。このように本種の日本でのコースはムギマキの渡りの第二コースに一致するものである。

5. あとがき Conclusion

以上の如くシマゴマの分布と渡りについて多くの新事実と私の考察するところを述べた。読者諸賢のお批判を仰ぐものである。また貴重なる資料をお送りくださった元七発鳥燈台長橋本秀雄氏および竹島燈台の諸賢、貴い観察談をお教示くださった山田信夫氏、長柄他喜男氏、の諸氏に厚くお礼申しあげる。

終りに重ねて申しあげたいことは、自然は広大であり、少しばかりの観察や資料を以て大自然をはかることは極めて危険であることである。本誌 76 号からはじめられた会員アンケートはこの点から考えてたいへんよいことであるし、また今後「日本鳥類目録第5版」を刊行する時は1部少数の会員にまかせることなく、全会員の協力のもとに編集して一層完全なものになすべきであると思う(昭和 35 年 3 月記)。

Migration of the Swinhoe's Red-tailed Robin, *Erithacus sibilans*, in Japan has been obscure. The author could collect the following records, including unpublished ones: Yagishiri, Hokkaido, spring (Udagawa), Yamagata, May 1921 (Captured as cage birds-Ishizawa), Niigata, May 1922 (M. Nakamura), Ishikawa, May 1922 (Many sang-Nagara), Tottori, late May 1940 (Songs heard-Yamada). These data are enough to regard it as an occasional spring transient through southern Korea and along Japan Sea coast of Honshu to reach Sakhalin where it breeds. It is reported to sing well on its way, staying a week or about ten days at one place. No autumn records are known yet, and its occurrence seems to be irregular and variable in number. The reason of such a particular migration pattern is discussed.

シモフリインコ (新称) の新亜種か A supposed new form of *Aratinga weddellii* (Deville) 黒田長禮 Nagamichi Kuroda

I found a so-called pair of unfamiliar medium sized green paroquets in a cage at a cage bird section, exhibited in the Mitsukoshi Department Store in Tokyo, on December 16th, 1959. They immensely excited my interest, because there is no description of the paroquet so far as I am aware, excepting approximate descriptions in Count Salvadori's Catalogue (1891) and Hon. Rothschild (1907). These live birds were examined by Monsieur Jean Delacour, a famous ornithologist and parrot-fancier, at that time when he was staying in Tokyo, and he, even